



## ありがとう、ロータリアン！ ① 国のために働く人間になれ



Kindai Kagaku Lanka (Pvt)Ltd. 社長  
A. W. K. プリヤンカ・ペレラ さん

出身国：スリランカ  
奨学期間：1993 - 95  
奨学期間中の学校名：東海大学  
世話クラブ：小田原城北 R C

スリランカから来日してまもなく、父が病気で倒れました。仕送りが途絶え、私費留学生だった僕は途方に暮れました。アルバイトを掛け持ちしながらの勉強で、授業中に居眠りすることもしばしば。「こんな生活を、いつまで続けられるだろう」と不安でいっぱいでした。そんなとき、ホームステイ先で知り合った小田原高校の先生が僕の生活を見かね、知り合いのロータリアンを紹介してくれたのです。それが、小田原城北ロータリークラブ（RC）の鈴木友徳さんでした。

### 父の面影を重ねて

初めてお会いした鈴木さんはニコリともせず、まるで怒っているような口調で、正直なところ、怖くて仕方ありませんでした。その後、何度か鈴木夫妻に会い、小田原城北RCの推薦を得て米山記念奨学生になることができました（※ロータリークラブ推薦制度は2001年に廃止）。東海大学3年生のときでした。

カウンセラーを引き受けてくれた鈴木さんは、慣れない日本で孤独だった僕の妻のためにパート先を世話してくださったり、お盆や正月には他の奨学生と一緒に自宅に招いて日本の伝統文化を教えてくださいななど、何かと心を砕いてくれました。厳しい半面、人情に厚い鈴木さんと、いつも優しい奥さんは、僕たち夫婦にとって実のお父さん、お母さん以上の存在です。

奨学生になってから、成績はみるみる上昇。また、日本の中高生に母国のことを教えたり、難民キャンプや阪神・淡路大震災の被災地でボランティア活動をするなど、

ようやく充実した留学生活を送れるようになりました。

いただいたのはお金ではありません。クラブの例会に行くと、皆さんが次々と僕のところにきて、「おまえ元気にやってるか」「勉強ちゃんとやってるか」と、声をかけてくれました。その言葉はまさに、父の言葉そのものでした。母国にいるころ、うるさいと思っていた父の「勉強やってるか」の一言。父が倒れ、久しく聞くことができなかった声が心によみがえり、どれほどうれしかったか。今、思い出しても涙が出るほどです。

大学卒業と同時に奨学金も終わりましたが、僕の成績を見た鈴木さんは「俺たちがお金を出すから修士課程に進んだらどうだ」と。日本でもっと勉強したかった僕はためらいながらも、小田原城北RCの皆さんの好意に甘えて進学し、修士課程を修了することができました。

「国のために働く人間になれ」。いつも鈴木さんからこう言われていた僕は、卒業後、鈴木さんの親友が経営する化粧品メーカーのスリランカ製造工場働くことになり、今では12の工場を持つ現地法人の社長として頑張っています。

### 「アラリヤ奨学金財団」の設立

2004年12月、スマトラ島沖でマグニチュード9.1の巨大地震が発生。スリランカでは津波にのまれ3万人以上が犠牲となり、数多くの人が家を失いました。あまりの惨状にぼうぜんとし、鈴木さんに助けを求めました。すると、小田原城北RCをはじめ近隣クラブ、鈴木



義援金で建てた家屋の贈呈式で

米山記念奨学金は、外国人留学生を支援する、日本のロータリー独自の国際奉仕事業です。この事業の最大の特長が、世話クラブ・カウンセラー制度。奨学生は世話クラブを通じてロータリーの活動や理念を知り、学校以外の日本人との交流を深めます。出会いの形はさまざま。今月からは、学友・奨学生から寄せられた体験談をもとに、ロータリアンとの“絆”を紹介する新シリーズ、「ありがとう、ロータリアン!」をお届けします。

さんの友人、僕の友人、勤め先の本社の方々から 650 万円もの義援金が集まったのです。このお金で、家を失った人々のために 25 軒の家を建てました。

残りは小田原城北 R C のプロジェクトとして、スリランカの植物から名づけた「アラリヤ奨学金財団」を設立、経済的事情で勉学を続けられない若い人々を支援しています。僕は現地の責任者として参加し、日本に帰ったときには必ず小田原城北 R C の皆さんに報告しています。今では小学生から高校生まで毎年 40 ～ 50 人に、奨学金を支給したり、学用品を寄贈したりしています。

未来のスリランカを支える人材を育成することは、僕にとって大きな喜びです。日本政府からはスリランカへ、多額の無償資金協力などがなされていますが、そのお金の一部でいいから、日本への留学生を増やすことに使ってもらえれば、互いの国が、もっと素晴らしい未来に向かうことができるのではないのでしょうか。

日本で学んだこと、そこで得た素晴らしい経験は、僕だけではなく、僕の周りにいる人間をも変えました。今、工場で働く何千人もの従業員とその家族の生活を支援することができるのも、日本に留学したおかげです。

3月11日の東日本大震災では、恩返しと言えるほど大きなことはできませんが、会社の仲間や友人、そして家を建ててもらった人々も協力して義援金を集め、小田原城北 R C を通じて被災地に送っていただきました。

奨学金で始まったロータリーとの関係は、今では切っても切れない深い絆となっています。私の日本のお父さんお母さん、小田原城北 R C の皆さん、日本全国のロータリアンの皆さん。心から、ありがとう。



鈴木友徳氏から一言

仕事で外国人との付き合いは多い方ですが、プリヤンカは真面目で努力家で、信頼できる男です。頭もいい。米山記念奨学金が終わった後、クラブの皆でお金を出し合って修士課程まで進ませたのも、彼の人柄と将来性を、われわれ一同が応援したかったからです。一昨年、ケンブリッジ大学で博士号を取ったと聞いて感心しました。彼のおかげで小田原城北 R C の事業、アラリヤ奨学金も一定の成果を出すことができています。これからも国のために働く人間であるよう、願っています。

#### ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見を、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

#### 活躍する米山学友の姿を地区で披露してください —— ホームカミング制度のご案内 ——



再来日した学友が地区大会でスピーチ

2008 - 09 年度からスタートした「ホームカミング制度」は、各地区に毎年 1 人の米山学友を招いてもらい、その活躍を多くのロータリアンに披露してもらおうという制度です。海外在住者だけでなく、国内在住、他地区出身の学友も対象にできます。これまでの 3 年間で延べ 48 人が招待され、地区大会などのスピーチでロータリアンへの感謝を伝え、現在の活動を報告しました。招かれた学友から好評なのはもちろん、招待した地区のロータリアンからも、「学友の成長に感動した」「素晴らしい企画で、とにかく続けてほしい」といった感想が寄せられています。米山学友との絆を深め、支援の成果を実感できるこの制度を、ぜひご活用ください。